

説教「人間、土を耕す者―神の慈しみと厳しさ―」

創世記 3 章 17～24 節、ローマの信徒への手紙 11 章 17～22 節

2005.10.9

日本バプテスト同盟 捜真教会

主の御名をほめたたえます。今朝は、創世記 3 章のアダムとエバの楽園追放に関する箇所を取り上げました。彼らが神の戒めを破ったために楽園から追い出されるという、罪に対する神の裁きの厳しさが、その結果として、人は土を耕す者となったというところに注目してみたいと思います。

今から 20 年ほど前、現在の金沢八景の家に移ったとき、その庭を耕して、何か作物を育ててみようと思いました。踏み固められた土を鋤くわを使って掘り起こすのですが、大変な作業だと分かってきました。土を耕すとき、私は農家で生まれ育ったので、田んぼを子供のとき耕したことを思い出しました。17～8 歳までは、学校に通いつつ、けっこう農業の手助けをやらされました。養蚕かいこのために畑仕事があり、田んぼの仕事は田植えから始まり、稲刈り、脱穀、そしてお米を倉に収めるまで続きます。

そのせいでしょうか、現在 私は父の歳を越えて生きておりますが、ある時ふと、自分が父を生きている、父が自分の中で生きていたような不思議な気さえしております。今、神学校の小さな畑を何年前から耕して、来週は神学生にもさつまいもの収穫の喜びを味わわせてやろうかと考えております。

さて、聖書に戻りますが、女が禁じられた木の実を 蛇に誘惑され取って食べ、アダムにも与え、食べた。その結果、女は産みの苦しみを与えられました。アダムはどうかとありますが、17 節後半で「お前のゆえに、土は呪われるものとなった」とあります。「お前は、生涯 食べ物を得ようと苦しむ」。土が呪われるということは、土地を耕しても、思うように土地が産物を出してくれないことを言います。逆に、神が土地を祝福すると、土地は沢山の豊かな作物を産出するのです。さらに 18 節を見ますと、「お前に対して、土は茨とあざみを生えいせさせる、野の草を食べようとするお前に」とあります。土は茨とあざみを生えさせるとあります。

パレスチナには至るところに、この茨とあざみが生えております。私が初めてイスラエルに入ったとき、眼下にガリラヤ湖を見下ろすその上に原っぱに立って、これがイエスキリストの活動されたあのが

リラヤ湖かと感激したものでありますが、ふと周りを見ると、そこにあざみが紫色の美しい花をつけて咲いていました。しかし、日本で見るのと違って、葉や茎がとげとげしくて、触ると痛い。また、すぐ隣には、前の年のものと思われる茨の枯れた茎が倒れていました。もの^{すご}しく固く鋭いとげをつけていました。あのイエスさまの頭に冠らされた茨の冠がどんなに痛いものであったか、想像がつくのであります。

この茨とあざみのことをヘブライ語で「コーツ ベ ダルダル」といって、耕す者を困らせる雑草の慣用語のようにになっているくらい厄介なものです。「野の草を食べようとするお前に」とあります。これは、土を耕して、そこで作物、野菜や麦といったものを手に入れようとしても、この茨とあざみといった雑草が邪魔をするのです。したがって、どうなるかといいますと、19 節「お前は顔に汗を流してパンを得る」。ほっておくと、雑草がはびこる。そこで、雑草を絶えず除去して土地を耕し、土を柔らかくしておく必要があります。そのために、人は額^{ひたい}に汗して働くのであります。

一家を支えるため、男は茨やあざみのはびこる大地と格闘するのであります。しかも、その格闘は一生続くのであります。聖書では 19 節にあるように、「土に返るときまで」と。土に返るということは、創世記 2 章で神がアダムをお造りになったとき、7 節「主なる神は、土（アダマ）の塵^{ちり}で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」とあります。しかし、時が来ると、神はその息を取り上げる。すると、人は元の土に返るのであります。人は一生苦労したあげく、土に戻るのです。

19 節でさらに、「お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る」のだと。このように、人が生きるためには労働の苦しみが伴うこと、その人生ははかないことを、19 節は見事なまでに現実味をもって表現しております。これは、人類が太古の昔から経験し続けた、土を耕す者の宿命とでも言いましょうか。聖書は、人間の生の現実を飾ることなく鋭く描いておるのであります。

さて、このように読んでいきますと、読む人の心が何か沈み込んでいくような、何か人生がつまらなくなり、気分が落ち込んでしまいます。ところが、聖書は不思議に、落ち込んだままでは終わらないのであります。次の 20、21 節に来ると、一つの転換が起こり、闇を打ち破る^{あけぼの} 曙の光が見えてきます。次の 20 節を見てください。「アダムは女をエバ（命）と名付けた」。これまでは彼女を女としか呼んでこなかったのですが、その女に初めて、名前が付けられます。この時点に至るまで、女の名を言わずに伏せていたと思われまふ。明らかに意図的にそうしたと言わざるをえませぬ。

その名はエバです。ヘブライ語では「ハツヴァ」ないし「ハツワー」と言います。これは「ハツヤー」、「生きる」という意味の言葉に由来することは明らかであります。ですから、エバに括弧^{かっこ}（ ）して「命」と訳しているのは適切な訳です。そして、「彼女がすべて命あるものの母となったからで

ある」とあります。女性はお腹なかに子を宿し、やがて産みの苦しみを経て、新しい生命を産みます。それは奇跡に等しい仕事であります。英語では "labor (骨の折れる仕事)" と言います。まさしく労働です。同時に、それは神の祝福であります。人は皆、やがて土に返るべきものとなりました。しかし、エバなる母を通して、親から子へ、子から孫へと命が継続してゆくという愛と希望を与えられたのであります。

生命が母によって継続されるということは創造主なる神の祝福であり恵みであると、最近、私は一層思うようになりました。これは、戒めを破った、死ぬべき者となった人間に対する神の深い憐れみというほかありません。

一瞬 憂鬱ゆううつな気分させた暗闇にこのように光が射し込んできたと言いましたが、次の 21 節に行きますと、その光がさらに明るさを増してくるのであります。21 節に、「主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた」とあります。神は、アダムと女に皮の衣服を作ってくくださったのであります。楽園に生活したとき、全裸を恥じ、それを隠すためにいちじくの葉をつづり合わせて腰にまわっていました。しかし、そんないい加減なもので、これから追放される地上の厳しい労働の生活には到底 耐えられません。そこで神さまは、丈夫で温かい毛皮の衣服を作ってくくださったのであります。そして、作っただけではありません。それを、神は彼らに着せられたとあります。

度々 私のことを語って恐縮ですが、私が子どもの頃は着物を着ていました。小学校の低学年までは、着物を着て、鞆かばんを肩にかけて学校に通ったことを記憶しております。子どもは成長しますから、やがて着物が短くなります。すると、母が着物を仕立ててくれます。出来上がると、「さあ、着てみなさい」。両袖を通して着物を着ますと、「やあ、よく似合う」と言って喜んでくれた母の笑顔が忘れられません。そのように、神はアダムとエバに丈夫な衣服を作って着せてくださったというそこに、これから追放しようとする二人に示された慈しみと愛とを読み取ることができるのであります。

このように、神は戒めを破った二人に対して厳しい裁きを与えましたが、決して冷酷な神ではなかった。かえって、厳しい中にもそれを上回る深い憐れみと慈しみを示しておられる神であるということ学ぶことができるのであります。ローマ 11:22a の「だから、神の慈しみと厳しさを考えなさい」。口語訳聖書では、「神の慈愛しゅんげんと峻厳しゅんげんとを見よ」となります。私はこの言葉を、立教大学大学院博士コースの渡辺 善太ぜんた先生から教えられました。

今日のテキストからは以上の事柄であります。もう少し新約のイエス・キリストにまで視野を広げ、今日取り上げた二つのこと、「土を耕す者」そして「毛皮の衣服を着せる」という二つのことに触れて終わりたいと思います。

「土を耕す」というヘブライ語は「アーバド」という動詞であります。それは昔、「奴隷が主人の

畑を耕すこと」を意味しました。アーバドの名詞「エベド」はといいますと、「奴隷」を意味します。つまり、奴隷は耕すことを通して、主人に仕えるのであります。面白いことに、アーバドから派生した名詞で「アボーダー」といいますと、それは「礼拝において、神に仕えること」を、「礼拝」のことをいいます。そう考えると、土を耕すという苦勞する働きは創造主である神に仕えることである、と言ってよいと考えられます。土を耕すという人間の生活を支える基本的行為は、家族や他の人に仕えるだけでなく、神に仕えるという広がりを持っているということになります。

土を耕すということでもう一つ 私が示されたことは、2 章 15 節で神がエデンの園を設けたとき、「アダムをその園に置き、楽園を耕し、守るようにされた」とあります。ここに注目してください。楽園、パラダイスという、皆さん、その中でどんな生活を想像されますか。何も生活の心配はないのだから、好きなだけ食べて、あとは寝転んでいる安楽な生活を、私などは想像したものです。しかし、神はそこで、アダムに土を耕す仕事を与えたのです。

寝転んで遊んでいる所ではないのです。神はそんな生活を求めなかった。土を耕させ、庭園の管理をさせたのです。楽園でさえ、人は土を耕し働くことが、実は楽園の楽しい生活ぶりであった、ということです。定年退職した人は、もう毎日のように出勤することがなくなると、何もしないでごろごろしている生活が決して楽しい楽園ではないことを経験するものです。定年になっても、人は他者に仕え神に仕えるという生き方が本当の喜びであるということが分かると思いますし、聖書はそれを私たちに教えています。

次にもう一つ、神が衣服を二人に着せてくださったという行為ではありますが、旧約聖書の中で、神が着せるというこの言葉にしばしば出会います。一つの例を挙げると、イザヤ書 61 章 10 節に「主は救いの衣をわたしに着せ、恵みの晴れ着をまとわせてくださる」とあります。神がアダムとエバに着せてくださった衣服はやがてイスラエルの民に示された救いの衣であり、それは恵みの晴れ着をまとわせてくださる神であることを示しているのです。

さらに、新約の時代になり、神の救いと恵みにあずかったユダヤ人パウロは、イエス・キリストによる救いのことを次のように表現しています。一つだけ挙げますと、ガラテヤの信徒への手紙 3 章 26、27 節に「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。バプテスマを受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです」とあります。すなわち、神は^{とうと}尊い独り子イエスさまを十字架にかけて死なせ、私たちを罪から救い出してくださいました。ここに、人類の罪に対する神の厳しさと、同時にそれを上回る神の無限の愛が示されたのであります。

私はかつて関東学院大学の神学部の際、研究のため、奈良の天理大学の図書館を訪ねたことがあります。天理という駅を下りて大学に向かう途中、人々が皆、「天理」という二文字を背中に染め抜い

たハッピーを着ているのには驚きました。まさに、天理という彼らの真理を身につけている天理教の信徒です。そうしますと、私たちクリスチャンは、キリストというハッピーを着て歩いているとみてよいわけですね。昔、ハワイで働いていた日本人がハッピーを着て働いていた。ハワイの人々は、ハッピーが英語の "happy" と聞こえるので、ハッピーを喜んだという話を父から聞いたことがあります。ですから私たちは、イエス・キリストというハッピーを着る happy な者とされていると言えるのではないのでしょうか。

楽園から二人を追い出して土を耕す者とされた厳しい神は、同時に丈夫な衣服、^{いな}否、永遠に朽ちることのないイエス・キリストという救いの衣を着せてくださったのであります。ですから、私たち・救いにあずかった者たちは、土を耕すという労苦を通して神と人とのために仕え、喜んで働く者とされているのです。キリストというハッピーを着て、身につけて、ハッピーな毎日をおくりましょう。